■シリーズ■ 中学校武道 ―授業の充実に向けて― 107

つまずきをどう克服したか①（相撲授業の再生・復活）

長野県木曽町立木曽町中学校

平成17年に木曽福島町・日義村・開田村・三岳村の4町村が合併して誕生した長野県木曽町は、長野県の南西部に位置し、総面積のほとんどを山林が占める緑豊かな町である。西に木曽御嶽山、東には中央アルプス木曽駒ケ岳がそびえ、町の中央には木曽川が流れている。四季折々の自然風景が人々の暮らしを支えている。その木曽福島は、古くから相撲が町技として盛んな地域であった。

中学校武道授業（相撲）指導法研究事業に同行し、6月29日～7月1日にかけて、木曽町立木曽町中学校・木曽福島相撲大会・木曽町小学生相撲大会を取材した。

今回は、「中学校武道授業の充実に向けて」の第8期企画「つまずきをどう克服したか」の第1回として、衰退しつつあった相撲授業を木曽町中学校及び周辺中学校でどのように再生・復活させていったのかを紹介したい。

第8期「つまずきをどう克服したか」前置き

中学校武道必修化は実施6年目を迎えて、いろいろな課題やつまずきが生じている。その課題やつまずきを学校現場がどのように克服し、有意義な武道授業を実施するに至ったのか、さまざまな事例を取り上げていきたい。

今回はその第1回として、元々は相撲が盛んであった木曽町で、一時期は衰退の危機に陥ってしまった相撲授業の〝つまずき〟とその克服のケースを紹介したい。

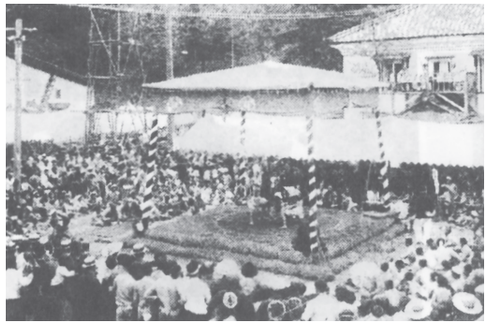
1 木曽福島・木曽の相撲の歴史

はじめに、木曽相撲連盟顧問の三村喜一郎氏の説明をもとに、木曽福島・木曽の相撲の歴史についてふり返ってみよう。

(1)木曽福島・木曽の相撲のはじまり

明治13年（1880）6月26日に、相撲を好んでおられた明治天皇の福島村（昭和42年より木曽福島町）への行幸があった。

昭和6年（1931）の同日、その明治天皇の行幸を記念して、明治大帝御駐輦記念奉祝相撲大会が広小路（現木曽町文化交流センター前）で開催された。当時の福島会報によると、大会には町全体で関わり、素人相撲規約を作成し、多くの係を決めて、計画的な運営がなされた。前夜には振れ太鼓の音が町中に響き、当日午前中には小学生、午後は旧木曽中・山林学校・青年学校の3校のリーグ戦があり大いに盛り上がった。夜は電灯の下で遅くまで一般の取組が行われた。



明治大帝御駐輦記念奉祝相撲大会（昭和6年6月）

この大会が原点となり、本格的に相撲大会が始まり、福島町民相撲大会（現在の木曽福島相撲大会）へと続いている。

昭和49年には、木曽福島少年相撲クラブが発足。同年に木曽福島町にてやまびこ国体相撲競技が開催されることが決定。昭和51年には、福島中学校（現木曽町中学校）で相撲部が創部された。さらに、全国に誇れる屋根付き土俵の相撲場（現木曽町民相撲場）も完成。昭和53年には、同国体相撲競技が木曽福島町で盛大に開催された。

(2)先人たちによる相撲普及に向けた尽力

しかし、国体後の昭和54年、相撲場を取り壊してテニスコートにする案が浮上する。これに反対したのが当時木曽相撲連盟理事長の植原延夫氏を中心とした相撲連盟の人々であった。植原氏たちは知恵を絞り、前述の相撲場を会場とし定期的な大会を開くことを決定。同年に、中部9県が参加する大規模な大会として、中部日本選抜中学生相撲大会を開催した。植原氏は地元の小中学校を回り、大会への出場を依頼。それは県内の相撲を絶やさないためであった。その後も植原氏たちは県内の相撲普及と青少年の健全育成のために大会を次々と開催していった。

また、小中学校の土俵作りでは、「いい土俵で子どもたちに相撲をとらせたい。業者に任せっきりではいい土俵はできない」という信念のもと、地域の人々とともに、20ヵ所以上で土俵を作製した。前述の相撲場の土俵も今から18年前に連盟関係者、選手が一体となって大規模な改修をし、毎年修繕を行っている。

この他にも東京農大をはじめとする大学相撲部の夏合宿の誘致など、さまざまな知恵と工夫を重ねて、県内相撲競技の底辺拡大に尽力していった。

(3)競技としての相撲の隆盛

その努力は徐々に実を結ぶようになる。土俵作りが功を奏し、土俵作りに携わった地元関係者の間で、相撲に対する理解・関心が生まれ、木曽郡の大会に多くの子どもたちが参加するようになった。

そして、クラブの子どもたちは県外大会で好成績をあげるようになる。福島中学校相撲部は、創部から18年たった平成6年に全国中学校相撲選手権大会において団体で準優勝。平成11年には木曽福島町で全国中学校相撲選手権大会が開催された。この時、安藤均福島中学校教諭（現木曽町立三岳小学校校長）が事務局を担当し成功を収めている。平成12年には沖縄開催の全中大会において、福島中学校相撲部は遂に優勝を果たした。連盟・学校・地域の重ねて行ってきた努力が全国制覇として花開い

木曽町中学校では御嶽海の関脇昇進の号外を掲示

た瞬間であった。

ちなみに本年6月に長野県出身力士として84年ぶりに関脇となった御嶽海（みたけうみ）（本名・大道久司、出羽海部屋）は、安藤氏による指導のもと、平成17～19年に同部に在籍し、優秀な成績を収めている。当時相撲部は目立つ存在になっていた。しかし、相撲部の指導において安藤氏は、部活が特別なものではなく学校教育の一環であることを心がけていたという。

2 相撲授業の衰退と再生・復活

長年に亘る多くの関係者の熱意と絶え間ない努力によって競技として全国区となった「木曽福島・木曽の相撲」であるが、授業としての相撲は中学校で武道授業が必修化となった平成24年度に、危機を迎えることになる。

⑴指導力の低下と相撲授業の敬遠

木曽地区では古くから各学校で相撲授業を行っていたが、平成20年代初頭になると、指導者の不足などにより相撲授業の指導力が徐々に低下していった。それに加えて相撲を専門としない教員の間では、「相撲の授業は、外の土俵でまわしを着けて裸でやらなければならないため、女子はできない」「まわしの着け方など、教員が相撲に関する様々な知識を身に付けなければならないので、実施するのは困難である」などの声が上がったという。

つまり、学校現場では相撲授業は、大相撲、競技相撲としてのイメージしかなく、指導法が確立していなかった。指導者不足と誤った認識――それらが相撲授業に対する負のスパイラルとなり、各学校で相撲を採用しないことに繋（つな）がっていった。ついに県内で5、6校はあった相撲授業実施校は必修化となった平成24年には、福島中学校1校のみとなってしまった。

⑵相撲授業の再生・復活

福島中学校から安藤氏が転出して2年後の平成22年度、福島中学校に赴任してきた相撲が専門の上村裕一教諭は危機感を覚えた。福島中学校では古くから男子において相撲授業が行われていたが、その福島中学校の相撲授業でさえも、教員は何をやっていいか分からなく、教材研究も不十分であった。「このままでは県内で相撲授業がなくなってしまう。授業がなくなれば、木曽福島の相撲の衰退にもなりかねない。なんとかしなければ……」

そんな中、平成25年に木曽郡の教育課程研究協議会の会場校として、福島中学校にて保健体育を実施してほしいとの依頼が来る。上村氏はチャンスと捉え、これをきっかけに相撲を本格的に単元化したいと思いたつ。すぐさま授業では相撲を行いたいとの要望を出した。

次は授業の指導法であるが、競技としての相撲が頭から離れない上村氏は地元連盟関係者に相談した。しかし、競技相撲としての指導内容が色濃く、期待に応える回答は得られなかった。

「これでは競技相撲としての要素が強く、学校現場には適していない。どうすれば……」と悩んだ上村氏は前述の安藤氏に相談した。安藤氏からは「現在、日本武道館・日本相撲連盟主催の中学校武道授業（相撲）指導法研究事業において研究者をしており、同事業では競技でない授業での相撲を目指している。学校現場に適し、相撲を専門としていない保健体育科教諭が実施可能な相撲授業の指導法を検討している」と上村氏が今まさにほしい指導法の説明があった。具体的には裸にならないとか、靴を履いての実践などである。上村氏は「これだ」と確信し、安藤氏に指導法の助言を依頼。まわしをしなければいけないとか上半身は裸でなければいけないとか相撲専門家としての概念を取り払い、同事業での指導法を参考にして授業を行っていった。安全面では細心の注意を払った。柔道の後受け身を参考にして、受け身の練習を徹底したという。

木曽町中学校（旧福島中学校）外観

また、福島中学校では、武道は男子のみが相撲を行っており、木曽福島相撲大会においても出場するのは団体戦・個人戦とも男子が中心であり、女子は個人戦希望者のみであった。しかし、小学生から男女とも相撲に慣れ親しんでいることもあり、女子からも相撲大会の団体戦に参加したいとの声があがった。そして5年前より本格的に男女共習で相撲授業を行い、大会にも男女とも全員参加するようになった。

⑶相撲授業の広がり

さらに、木曽体育研究会（木曽郡の小・中学校の保健体育科教諭等が集まる研究会、およそ30名ほど）で、安藤氏は当時、会長を務めており、その会で近隣の中学校教諭に相撲授業の指導法を広めたという。また、木祖村立木祖小学校校長で現在同研究会会長の中野則秋氏からは「武道の中で相撲は安全性も高いし、武道本来の特性に触れることができ、授業に適している。再び木曽郡では相撲授業を行ってはどうか」と提案した。

こうした尽力により、現在は木曽町中学校の他に町内で、開田中学校、日義中学校が、近隣の大桑村でも大桑中学校が実施するに至った。各校の授業では、同研究会が協力体制をとりながら、木曽町中学校同様に前述の指導法研究事業の指導内容を参考に相撲授業を実施している。なお開田中学校では平成28年木曽郡教育課程研究会において公開授業を実施した。

また現在、木曽町内の小学校においても1年生から6年生まで3週間かけて各学年6時間程度相撲の授業が行われており、授業で三村氏をはじめとする連盟関係者6名が外部指導者として指導している。授業では基本を大切にしており、中腰の構えで、まわしをあまり意識しないで頭をつけて押しをするように心がけているという。

3 木曽町中学校の相撲授業

相撲大会前日である6月29日、木曽町立木曽町中学校において1年生から3年生による大会直前の相撲授業（7回目）を取材した。授業は、1クラス（およそ男女26名）ずつにより、試合場が2面とされる柔剣道場にて学校で購入した相撲マットを敷いて実施された。剣道場は板の間であるのでマットの下にクッションが敷かれている。生徒たちは、まわしは着けずに体育着で実施していた。

▽第1学年の授業
（授業者＝今井洋平教諭・専門＝陸上競技）

生徒たちは慣れた手はずで準備運動を済ませ、蹲踞（そんきょ）にて黙想。今井教諭より、今回の学習課題として「力強く押そう」「押しをいかして勝とう」の2つが提示された。押しで大切なことはとの質問に対し、生徒からは「背をまるめる」「脇をしめる」などの意見が出された。生徒たちは学習ノートに今回の課題を記入した後に押しの練習に入った。部屋（グループ）ごとに集まり、今日の学習課題を話し合い、練習が始まった。各部屋では、1人対多人数で押しをしたり、大きな輪になり手押し相撲をしたりなど、変化に富んだ練習がなされていた。10分の練習の次は、男女別の団体戦である。生徒たちは審判の始めの合図のもと、男女とも明日のクラスマッチに向け、気合い充分の取組をみせていた。

第1学年授業①（1人対多人数による押し）

授業の最後に生徒から「力強く押せてよかった。明日も押しを意識して頑張りたい」「負けてくやしかった。明日は前に押すことを意識して勝ちたい」など大会への意気込みが寄せられた。

○今井洋平教諭（第1学年担当）

「今年赴任1年目で、相撲授業の経験はありませんでした。女子からは、恥ずかしいとか痛そうなど相撲をやりたくないとの声はありましたが、実際に授業を行ってみると、その子たちも楽しんでいました。やはり小学校から相撲に親しんでいることが大きいと思います。最初と最後の挨拶はしっかり行っています」

第1学年授業②（授業では押しの指導がなされた）

▽第2学年の授業
（授業者＝上村裕一教諭・専門＝相撲）

準備運動、蹲踞による黙想の後、上村教諭より、「自分の形（型）で勝とう」との学習課題が提示された。具体的には「押し」と「寄り」のどちらか。生徒たちはどんな相撲を取りたいのか学習ノートに記入する。「押し」で大事なことはとの質問に対し、「相手の下に脇を入れる」「寄り」では「下手は深く、上手は浅く」などの回答があった。上村教諭から押しと寄りの注意点がまとめられ、グループによる練習に入った。生徒たちは自分が得意とする技を10分間丹念に練習。その後、男女別の団体戦に移った。1年生と同様に、気合い充分の取組をみせていた。特に女子は授業以上の激しい相撲を展開。研究事業として視察していた研究者たちを驚かせていた。授業の最後に、生徒から押しで気づいたこととして「相手の下に上手く入れなかった。膝を曲げればいいと思う」、上村教諭から寄りで気づいたこととして「まわしを切り、巻き替えた生徒がいた。自然にできていてよかったです」との感想が述べられた。

第2学年授業①（研修者を驚かせた女子の取組）

○上村裕一教諭（第2学年担当）

「昨年の授業も覚えており、生徒は応援の仕方などがきちんとできておりました。最後のまとめで生徒から気づきが出れば良かったのですが…。しかし、中腰の構えを大事にし、良い動きが沢山ありました。女子の方が身体が柔軟なのですんなりと相撲の動きを身につけます。恥ずかしいとの気持ちがなければですけど」

第2学年授業②（上村教諭による指導）

第3学年授業①（男子生徒による下手投げ）

▽第3学年の授業
（授業者＝水川敏彦教諭・専門＝サッカー）

3年生の授業では水川教諭より、どんな投げ技があるのか生徒たちに質問。「上手投げ」と「下手投げ」があげられ、学習課題は「相手を崩して、投げたりする攻防を展開する」とされた。授業は1・2年生と同様に展開し、男女別の団体戦で男子たちは土俵際にて激しい投げ技を繰り出し、女子も柔軟性のある攻防を展開していた。授業の最後に生徒からは「自分が安定した形になったら技をかける」などの気づきが挙げられた。

第3学年授業②（グループでの反省）

○水川敏彦教諭（第3学年担当）

「本校に赴任し相撲授業を始めて3年目となります。生徒たちは意欲的にやってくれています。3年生は一人ひとりが胸を張れるくらいしっかりできています。相撲の場合、技を覚えてなくても試合ができるのが一番の楽しさですね。授業では、相手を思いやったり、礼儀作法を大切にしています」

4 木曽福島相撲大会

中学校の大会は旧木曽福島学区で実施するため、現在は木曽町中学校の1校が参加している。

6月30日12時半より、木曽町民相撲場にて木曽町中学校の生徒（175名）による第44回木曽福島相撲大会（主催＝木曽町・木曽町教育委員会・木曽福島公民館）が開催された。

大会では各学年男女別による6部門の個人トーナメントと、各学年男女別による6部門のクラス対抗リーグ戦（7人制）が行われた。生徒たちは大会でもまわしは着けずに体育着で出場。審判は主審を含めた4名で交代しながら進行。安藤氏や上村氏たちが代わる代わる行った。

開会式後、すぐさま生徒たちは1組と2組の二手に分かれて、全員による応援合戦が繰り広げられた。生徒たちは円陣を組み「頑張るぞー」と士気を高める。試合は1年生女子の個人トーナメントから始まる。整備された土俵の上で熱戦が繰り広げられ、生徒たちは大粒の汗を流した。応援では教員も声を絞り出し、応援歌の指揮をとっていた。

午後3時にもなると各部門の試合は徐々に終了していく。生徒・関係者に話を伺った。

1年男子個人優勝の生徒は町のサッカークラブに通っている。大会では生徒の祖父母が応援に来ていた。「サッカーはあまり強くないけれど、相撲は優勝できましたね」と祖母は満足そうに笑みを浮かべた。

はじめての相撲大会となる今井教諭は「女子も形がしっかりしている。男子は忠実に下から上へと押しができています。女子の一部では大会前まで気落ちしている生徒もいましたが、大会を通して面白いと感じているようです。今後の授業が楽しみです」と笑顔を見せた。

生徒の感想

○3年女子（吹奏楽部）

「3年間全力をつくしました。皆が一生懸命になってやるのが楽しいです」

○2年男子（バスケットボール部）

「自分なりの相撲が取れました。最後まで粘り強くできたと思います」

○3年男子（相撲部）

「中学校1・2年と優勝したので、今年も優勝できて嬉しいです。この頃は腰を痛めて相撲はとっていませんでしたが、決勝ではイメージした相撲を取ることができました。御嶽海関は町の外から町を活気づけています。僕は将来、町の中から町を活気づけられるような指導者になれたらいいなと思います」

２年女子クラス対抗

３年男子クラス対抗

◎邑上豊美木曽町教育委員会教育長

「木曽町はもともと相撲が盛んな地域です。明治天皇の行幸を記念して相撲大会が始まりました。当時の大会では高校生や一般も夜中まで試合を行っていました。この大会も44年間続いてきたわけです。私も始めの2年くらいはまわしを巻いて出場していました。

その間に立派な指導者も出ましたし、御嶽海のような素晴らしい力士も誕生しました。保健体育の授業で相撲を採用しているのは珍しい地域ですので、町をあげて、これからも相撲の普及振興に努めていきたいと思います」

仲間と喜びを分かち合う

会場全景

場外では１組と２組それぞれの応援合戦となった

5 木曽町小学生相撲大会

小学校の大会は、木曽町教育委員会が町技といえる相撲に着目し町内の小学校が一堂に会して、平成25年に開催。福島小学校の他に、日義小学校、開田小学校、三岳小学校の4校で実施している。本年は466名が参加した。

7月1日、大会では多くの保護者が観覧（約500名）。父母だけでなく、お孫さんの活躍を観に高齢者も多く来場した。足が不自由で会場に来られない高齢者などのため、地元の木曽広域ケーブルテレビが生放送するほどの充実ぶり。いかに地元住民がこの大会に注目しているかが窺（うかが）える。また、木曽町中学校の相撲部はスタッフとして大会運営に加わっていた。

日義小学校教員によると学校では、大会のため、相撲授業期間の3週間以外に1週間3回分の時間を大会に向けた練習時間としているとのことだ。

木曽町小学生相撲大会

生徒たちは、始まる前には「お願いします」、終了後は「ありがとうございました」と大きな声で挨拶。保護者たちは「頑張れ！頑張れ！」の応援合戦を繰り広げた。小学4年生女子の部では、体格差で大きく劣る小さな児童が相手を見事にいなし勝利。場内からは万雷の拍手が送られていた。

6 まとめ

明治天皇の行幸に始まり、植原延夫氏、三村喜一郎氏たちが木曽に根付かせ、安藤均氏たちが競技として全国区に押し上げ、上村裕一氏たちが授業としての側面を再生・復活させた木曽福島・木曽の相撲。実は上村氏は、安藤氏が福島中学校に赴任してきた1年目の相撲部主将である。上村氏の当時の印象を安藤氏に伺った。「僕が相撲部の顧問となり、初めて相撲場に入った時、ポツンと一人で土俵を掃いている生徒がいました。それが当時の相撲部主将であった上村先生でした。上村先生とは不思議な縁で繋がっています」

負のスパイラルにより、一時、実施校は1校のみとなったが、その裏には連綿と続いている関係者たちの努力の連鎖というもっと大きな正のスパイラルが存在していた。また、地元の子どもたちは、三村氏等の尽力により小学生から相撲に慣れ親しんでいる。このことは相撲授業復活となった大きなポテンシャルといえる。

平成39年には長野県で国体が内々定。木曽町では相撲競技を再び誘致する意向だ。小・中学生の大会で相撲に取り組んでいた児童・生徒を思い起こすと、未来の指導者・功労者の誕生も期待できる。これからも「木曽福島・木曽の相撲」は人々の絶え間ない努力によって続いていくことだろう。

（本誌＝長澤克成）

快適で安全な都市空間の創造をめざす …東洋実業グループ

●ビルディング・トータル・マネジメント ●清掃等建築物の環境衛生管理
●空調、電気、水系統等諸設備の運用、管理 ●警備、保安、駐車場管理
●原子力セキリュリティ及び施設メンテナンス ●工場、ダム等のセキリュリティ ●案内、受付他料金徴集業務 ●公園等のグリーンメンテナンス
●ビルメンテナンス用ソフトの開発販売 ●バイオ研究開発
●その他建築物の運用、管理に係る一切の業務

TOYO JITSUGYO 株式会社 東洋実業 代表取締役 横田 正弘

札幌本社／札幌市中央区北六条西22丁目250番14東実ビル TEL(011)612-1911(代)
東京本社／東京都新宿区西新宿1丁目26番2号新宿野村ビル TEL(03)3345-0531
営業所／函館・室蘭・苫小牧・千歳・恵庭・小樽・余市・岩内・石狩・岩見沢・旭川・士別・富良野・占冠・帯広・北見・釧路・日高・遠別・深川・埼玉
海外事業／株式会社東洋実業マレーシア／東洋実業シンガポール PTE. LTD.／東洋セキュリティ＆ビルディング・マネジメント（香港）LTD.